埼玉大学紀要　教育学部，62(1):159-173（2013）

天台山の詩歌（其八）
――盛唐（下）

薄井俊二　埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード：天台山、天台集、漢詩、仏教文学、道教文学

はじめに

本稿は、天台山に関わる詩歌について検討を加えることを通して、当時の人々の天台山に対するイメージとその変遷を考察しようとするものである(1)。今回は、盛唐期の詩として、後世の仮託ではないかとされる李白の作品二点、皇甫曾の作品とされる一点、杜甫の作品一点を取り上げる。また楊山人に関わる高適の作品一点も検討する。最後に盛唐時代の天台山の詩について概観する。

●凡例

・周栄初選『天台山詩選』（天台県文化局、一九七九）（「周本」）も参照テキストとした。

・その他はこれまでと同じ。

九　天台山の詩（其八）――盛唐（下）

【53】瓊臺　　瓊台　　李白

☆天台勝蹟録巻三（「勝蹟録」）、周本、許尚枢『天台山詩聯選注』（「許本」）巻八

■本文と訓訳

龍樓鳳閣不肯住　　龍樓鳳閣　肯へて住かず
飛騰直欲天台去　　飛騰して直ちに天台に去らんとす
碧玉連環八面山　　碧玉連環　八面の山
山中亦有人行路　　山中に亦た人の行く路有り

青衣約我游瓊臺　　青衣我に約す　瓊臺に游ぶを
琪木花芳九葉開　　琪木に花芳しく　九葉開く
天風飄香不點地　　天風香を飄はせて　地に點せず
千片萬片絶塵埃　　千片萬片　塵埃を絶つ

我來正當重九後　　我の來るは正に重九の後に當り

嘯把煙霞俱抖擻　　嘯(うそぶ)きて煙霞を把(と)り、倶に抖擻す
明朝拂袖出紫薇　　明朝袖を拂ひて紫薇を出で
壁上龍蛇空自走　　壁上に龍蛇して空を自ら走らん

■文字の異同と校勘

＊勝蹟録を底本とする。ただ、この詩は李白全集などには見えず、仮託ではないかとされる。

［閣］周本・許本作闕。　［人行］周本・許本作行人。　［嘯］周本・許本作笑。　［薇］周本・許本作微。

■語注

○龍樓…皇太子の居所、朝廷。○鳳閣…華麗は楼閣で、多くは皇宮内の楼閣を指す。謝靈運「擬魏太子鄴中集詩・平原侯植」（「文選」巻三十）に「朝遊登鳳閣、日暮集華沼」とある。周本らのごとく「鳳闕」ならば、皇宮・朝廷の意。晋王嘉「拾遺記・魏」（「漢魏叢書」）に「青槐夾道多塵埃、龍樓鳳闕望崔嵬」とある。○碧玉…豊かな自然の樹木の緑をいうとも、神話的な碧の宝玉をいうとも取れる。○八面山…許本は百丈坑のことを描写するというが、証拠があるわけではない。○青衣…青衣神か。民に養蚕を教えたという蠶桑氏の別名で、青い衣を着ていたという。○琪木…琪は美玉。琪樹なら仙境の玉樹で、孫綽「游天台山賦」に「建木滅景於千尋、琪樹璀璨而垂珠」とあってより、天台山に強く結びついた表現。○九葉…九代。○天風…風。○重九…九月九日、重陽の節句。この日は高い山に登って遊ぶのが習俗であった。○抖擻…もちあげてふりはらう。仏教用語では、煩悩や汚れを振り払う、頭陀行のこと。ここではその意味か。○拂袖…許本は決然とした動作の様という。○紫薇…植物の名。紫微と同じ場合も。紫微なら道教の宮殿名によくつけられる。○龍蛇…躍動する草書体の筆勢をたとえる。李白「草書歌行」（「李太白全集」巻八）に「怳怳如聞神鬼驚，時時只見龍蛇走」とある。許本は、世俗への別れの言葉を壁に揮毫したとする。

■口語訳

天子や皇太子の宮殿でも行こうとはしない
高く飛んで真っ直ぐ天台山へこそ行きたいのだ
天台山は碧の宝玉が連なり、八方を囲まれており
その山中には人が行く路も通っている

青い衣の神仙が瓊台に遊ぶことを約束してくれた
そこでは玉の樹木に花が九代にもわたって開き続けている
風がその香りを漂わせて、地面に落ちることもなく
千万もの香りで満たされ、汚れた世俗の塵などひとつぶもない

私がここ天台山瓊台に来たのは、ちょうど重陽の節句の後であった
嘯きながら、芳香をただよわせる霞を手に取り、神仙とともに
　煩悩や汚れを払って行く
明朝には決然と紫微宮を出
壁に草書で別れの言葉を書き付けて、大空へ自ら足を運んでいこう

■解説

韻字は、「住・路」で、去声七遇、「去」で、去声六御。「臺・開・埃」で、上平十灰。「後・擻・走」で、上声二十五有。韻からも三部構成であることがわかる。「天台」「琪木」の語があり、天台山を意識したものであることは間違いなかろう。しかし、具体性に乏しく、他の山のことだとしても違和感はない。また李白の作品かどうかも決め手になるような記述はなく、不詳である。

【54】夢遊天台山　夢に天台山に遊ぶ

李白

☆勝蹟録巻一

■本文と訓訳

天溶溶　天は溶溶たり
雲濛濛　雲は濛濛たり
天風一日吹我夢　天風　一日　我が夢を吹き
我夢再上天台東　我　再び天台の東に上るを夢む

台山四萬八千丈　台山は四萬八千丈
上有玉平之府　上に玉平の府有り
乃與瑤天通　乃ち瑤天と通ず
長橋一道度絶壑　長橋一道　絶壑を度る
猶如虹霓隱隱盤晴空　猶ほ虹霓の隱隱として晴空に盤(わだか)まるがごとし

台山星斗手可摘　台山星斗手づから摘むべく
玉京石扇開玲瓏　玉京石扇　玲瓏と開く
瓊臺銀闕照初日　瓊臺銀闕　初日に照らされ
半天仙樂聞笙鏞　半天に仙樂　笙鏞を聞く

海霧掩袂赤城曉　海霧　袂を掩ふ　赤城の曉
方廣宛在虛無中　方廣　宛も虛無の中に在り
仙源流水隔凡世　仙源流水　凡世に隔たり
天風吹落桃花紅　天風　吹き落とす　桃花紅

五百眞仙隱蹤跡　五百の眞仙は蹤跡を隱し
天人蹴踏奔象龍　天人蹴踏し象龍を奔らす
金瓜半熟蛇護樹　金瓜半熟す　蛇　護るの樹
錦策倒掛虬枝松　錦策倒掛す　虬枝の松

松頭瀑布灑飛雪　松頭の瀑布　飛雪を灑(そそ)ぐ
下有兀坐龐眉翁　下に兀坐せる龐眉の翁有り
心空意定神氣秀　心は空　意は定　神氣秀で
半肩白髮雙睛瞳　半肩の白髮に雙睛瞳

既非桐柏仙　既に桐柏仙に非ず
又非閭丘公　又た閭丘公に非ず
乃知定公招我手　乃ち知る　定公の我が手を招き
邀我共入摩尼宮　我を邀(むか)へて共に摩尼の宮に入るを

甘露洗我身　甘露　我が身を洗い
靈液澆我胸　靈液　我が胸に澆(そそ)ぐ

授我天台之寶訣　我に天台の寶訣を授く
可以揮手兮八極　以て手を八極に揮(ふる)ふべく
眞與造化流無窮　眞に造化と無窮に流る

言未盡　言　未だ盡きず
情未終　情　未だ終らず
獨鶴一聲驚我夢　獨鶴の一聲　我が夢を驚かす
自古活佛現方廣　古より活佛　方廣に現る
白月掛在天姥東　白月　天姥の東に掛かれり

■文字の異同と校勘

なし

■語注

○溶溶…広々とした様。劉向「楚辞・九嘆・愍命」（「楚辞」）に「「心溶溶其不可量兮、情澹澹其若淵」とある。○濛濛…乱れ満ちる様。漢枚乗「梁王菟園賦」に「羽蓋繇起，被以紅沫，濛濛若雨委雪」とある。○四萬八千丈…「真誥」に「桐柏山、高一万八千丈、其山八重、周回八百餘里」とある。○玉平…不詳。○遙天…天空の美称。元代以降では、天上の仙境をいう例もある。明鄭真「奉呈同知錢相公詩」に「散花仙侶下瑤天、華燭光開錦繡筵」とある。○隱隱…隠れていて、不分明な様。劉宋鮑照「還都道中詩」に「隱隱日沒岫、瑟瑟風發谷」とある。○玉京…天帝の居所。あるいは仙都。○玲瓏…玉の清らかな音。○銀闕…天上にある白玉京の門。仙人や天帝の居所。梁元帝「揚州梁安寺碑」に「白珪玄璧、餞瑤池之上。銀闕金宮、出瀛州之下」とある。○半天…空の中程。中空。「南史」梁武帝紀下に「及崔慧景之逼、長沙宣武王入援、至城、夢乘馬飛半天而墜」とある。○鏞…大鐘。○海霧…天台山は海からは遠い所に位置する。しかし、最高峰の華頂峯は望海尖とも称され、海が見えるとされる。雲海を見下ろした経験と重ね合わせているのだろうが、天台山が海の霧に被われるという表現は、もはやありきたりである。○掩袂…袂で被うこと。ここでは霧が赤城山に照る暁を被ってぼやけさせている様。○方廣…天台山中の方広寺。○仙源…仙人の居所。○五百眞仙…方広寺には五百羅漢の説話が伝わるが、ここでは真仙としている。道仏習合の現れであろうか。○象龍…彫刻の龍、あるいは龍に似た馬（漢代の馬の名）。ここでは象と龍ととった。○金瓜…植物の名か。○虬…みづち、小型の龍。○兀坐…一人で端座する。○龐眉…太い眉。歳を経ていることを表す。○桐柏仙…王子晋のことか。○閭丘公…閭丘方遠のことか。天台山玉霄宮で修行した道士。○定公…不詳。○摩尼…マニ教か。ササン朝ペルシャから伝播してきた宗教で、唐代に流行。武宗により禁教とされたが、その後も明教と呼ばれ、道教や仏教の一部のような形で存続した。明代に弾圧され、ほぼ消滅した。李白とマニ教との関わりは不明。○天姥…天台山の西隣にある名山。

■口語訳

天はひろびろと
雲は乱れ満ちる
風が吹いて私の夢を吹き散らす

私は再び天台山の東に昇るのを夢に見ている
天台山は高さが四万八千丈
その上には玉平府がある
そこから天上の仙境とつながっているのだ
長い橋が一本、絶壁を渡っており
ちょうど、虹がぼんやりと晴れた空に蟠っているかのよう

天台山からは北斗星が手でつかめるほどであり
仙界の門の石の扉が開く美しい音が聞こえる
天台山の瓊台と天界の銀闕とが初日に並び照らされて
中空には仙界の音楽が鳴り、笙や鏞の音が聞こえる

立ちこめる海霧が赤城山を照らす暁を霞ませ
方広寺も、なにもない虚無の空間にあるかのようだ
清らかな水の流れる仙境は塵世からかけ離れており
吹く風が赤い桃の花びらを散り落としている

ここには五百もの仙人が隠棲し
神人が象や龍を駆使して飛び回っている
蛇が守護する樹木に、金の瓜が半ば熟してまとわりつき
みずちが形成する松に、錦の策を逆さまにして架ける

松の先端に瀑布の水が飛ぶ雪のように注いでる
その下に、眉の長い翁が一人で端座している

その心は空、意識は定であり、精神気息が秀で
白髪が肩の半ばにかかっており、双眼は清らかだ

もとより王子晋様であるはずはなく
閭丘公でもありえない
そうこうしているうちに覚った、定公が私の手を引いて
私をマニ教の宮に迎え入れようとされているのだと
甘露が我が身を洗い清め
霊液が私の心に注いで汚れを払った

そして私に天台の宝たる秘訣を授けてくれた
かくして四方八方の天の果てまで飛び去ることができ
造物主とともに無窮の時間に流れることができることとなる

その言葉が未だ言い終わらず
気持ちも引き続いているうちに
鶴の一声で夢から覚めた
そういえば、方広寺には生き仏が現れるという
白く輝く月が、天姥山の東に懸かっていた

■解説

韻字は「濛・夢・東・通・空・瓏・中・紅・翁・瞳・公・宮・窮・終・夢・東」が、上平一東の韻で、「鏞・龍・松・胸」が、上平二冬の韻。両者は通韻であろう。

天台・赤城山・方広・桐柏仙など、明らかに天台山を詠んだ

ものである。しかし、実際の登攀ではなく、夢での遊覧である。天台山への夢の遊覧と神秘体験について、李白には「夢遊天姥山」の詩がある。この詩はそれを踏まえたものか。夢で天台山に遊び、楽しんでいたところ、一人の神仙に摩尼宮に招かれ、作者自身も清められた。と、そこで目が覚めた、というものである。マニ教との関わりも含め、李白の手になるかどうかを判断する決め手はない。

【55】送少微上人東南遊　少微上人の東南遊するを送る

皇甫曾

☆周本、許本巻五に一聯

★天台山方外志（以下「方外志」）、全唐詩巻二一〇、古今図書集成（以下「古今」）巻一二五、皇甫曾詩集（四部叢刊三編「唐皇甫冉詩集」附録）

劉長卿詩集巻一

■本文と訓訳

石梁人不到　石梁　人　到らず
獨往更迢迢　獨り往き　更に迢迢たり
乞食山家少　食を乞はんとするも　山家少なく
尋鐘野寺遙　鐘を尋ねて　野寺遙かなり
松門風自掃　松門　風　自ら掃き
瀑布雪難消　瀑布　雪　消え難し
秋夜聞清梵　秋夜　清梵を聞く
餘音逐海潮　餘音　海潮を逐ふ

■文字の異同と校勘

＊皇甫曾詩集を底本とする。異同は無いが、劉長卿関係資料とは異同がある。

［梁］劉長卿作橋。　［寺］劉長卿集作路。

■語注

○少微上人…不詳。○迢迢…道のりが遠い様。○松門…天台山の国清寺へは松林を抜けていく。○瀑布雪…天台山で最も有名な石梁瀑布を指すだろうが、ここでの雪とは飛沫ではないか。

■口語訳

天台山の石梁は中々人が行き出さないところ
そこをただ一人で向かわれるが、道のりは果てしがない
食べ物をもらおうにも山中に人家は少なく
鐘の音を頼りに遙かな山寺へと進む
国清寺の門前をなす松並木は、きれいに風に払われており
石梁飛瀑では、飛沫が消えない雪のように飛び散っている
秋の夜、僧侶達の唱える清らかな念仏の声が聞こえる
その途切れない声は海の潮の音を追っているかのよう

■解説

韻字は、「迢・遙・消・潮」で、下平二蕭の韻。五言律詩。撰者の皇甫曾（七二三～七八五？）は、字は孝常、皇甫冉の

弟。唐の潤州丹陽（江蘇省鎮江）の人。天宝十二年（七五三）の進士で、諸官を歴任した。兄と並んで詩名をあげた。「集一巻」があり、今は「皇甫曾詩集」として兄の詩集に附載されている。

天台山へ向かう人を送るもの。その中で、天台山を描写するが、国清寺の松並木や石梁飛瀑などの有名な形勝を描く。実体験に基づく、写実的なものではなく、手にしている情報をもとに想像したものだろう。

この詩は、全唐詩巻一四七の、劉長卿「送少微上人遊天台」の詩に酷似している。同詩は劉長卿の詩集（「四部叢刊」初編）に収録。劉長卿は生没年不詳。開元二十一年（七三三）の進士。至徳年間（七五六～七五八）の在官は確認できる。その後左遷されるなどして、河北の隨州刺史で終わる。「劉長卿集」十巻がある。

【56】觀李固請司馬弟山水圖三首（其二）

李固、司馬弟に請ふの山水圖を觀る　三首（其の二）

杜甫

★全唐詩巻二二六、杜詩詳注巻十四

■本文と訓訳

方丈渾連水　方丈　渾（すべ）て水に連なり
天台總映雲　天台　總じて雲に映ず
人間長見畫　人間にて長く畫を見る
老去恨空聞　老い去りて空しく聞くを恨む
范蠡舟偏小　范蠡　舟　偏へに小にして
王喬鶴不群　王喬　鶴　群がらず
此生隨萬物　此の生　萬物に隨ふ
何處出塵氛　何れの處にか塵氛を出さん

■文字の異同と校勘

杜詩詳注を底本とする。

［老去］全唐詩一作身老。［處］全唐詩作路。

■語注

○方丈…東海の神山の一つ。孫綽「遊天台山賦序」に「渉海則有方丈蓬莱、登陸則有四明天台」を踏まえた表現。○范蠡舟偏小…范蠡は春秋越の名臣。宿敵の呉を破った後、政治家をやめて国を去り、名を朱公と変えて、商人として成功した。国を去るところを「史記」貨殖列伝は「乗扁舟、浮於江湖」と表現する。○王喬…王子晋。孫綽「遊天台山賦」に「王喬控鶴以冲天」とある。

■口語訳

方丈山は四面を水で囲まれ
天台山はその姿を雲に映している
私は俗世にあって長く絵を眺めてきたが
年老いてしまい、これら仙山を実見できないことを恨むばかり
范蠡は小さな舟を浮かべ
王喬はたった一羽の鶴に乗っている

彼らは万物の変化のままに自然にしており
汚れた塵埃とは全く無縁である

■解説

韻字は「雲・聞・群・氛」で、上平十二文の韻。五言律詩。

杜甫（七一二～七七〇）については略す。

杜詩詳注によれば、蜀人の李固が、司馬の官を務めたことのあるその弟の山水図について、杜甫の題を請うたのに応えたものだという。蜀滞在中（七五九～七六五）の作か。三首からなり、第一首は作詩の経緯と蓬莱が描かれていることを歌い、第二首が画中の風景と人物、第三首が画中の山水と景物を描く。その第二首。

その絵に方丈山・天台山や范蠡・王喬が描かれているので、そのことを述べたと解する意見があるが、必ずしも宗でなくともよかろう。山水画を見て、孫綽の「遊天台山賦」や范蠡を連想してこのように述べたとも解せよう。いずれにせよ孫綽の賦に触れつつ天台山に関することを歌っていることには違いがない。手慣れていると言えるが、素材や表現においては、ややありきたりであろう。

［参考］送楊山人歸嵩陽　　楊山人の嵩陽に歸るを送る　　高適

★全唐詩巻二一三

■本文と訓訳

不到嵩陽動十年　　嵩陽に到らざること　動（ややもす）ればの十年
舊時心事已徒然　　舊時の心事　已に徒然たり
一二故人不復見　　一二の故人復た見えず
三十六峰猶眼前　　三十六峰猶ほ眼前にあり

夷門二月柳條色　　夷門は二月柳條の色
流鶯數聲淚沾臆　　流鶯數聲し淚　臆を沾す
鑿井耕田不我招　　井を鑿ち田を耕やし　我を招かず
知君以此忘帝力　　知る君の此を以て帝力を忘るるを
山人好去嵩陽路　　山人好く嵩陽の路に去る
惟余眷眷長相憶　　惟だ余は眷眷として長く相ひ憶ふ

■文字の異同と校勘

題について、全唐詩一作別楊山人。［時］全唐詩一作家。

■語注

○嵩陽…いまの登封。嵩山の麓のまち。○動…たちまち。○徒然…ただそれだけである状況。○三十六峯…嵩山は太室山と少室山の二山からなる。このうち、「少室山三十六峯」の呼称が速くから見える。○夷門…戦国時代魏の都城の東門。夷山の上にあったからの呼称。のち、大梁（開封）をも指した。○鑿井耕田、忘帝力…堯帝の治世があまりにもすばらしく平穏なので、老人が「鑿井而飲、耕田而食、帝力何有於我哉」と言ったという（皇甫謐「帝王世紀」）。もとは政治のすばらしさを表したが、

のちに隠居して世事に関わらないことを「忘帝力」と言うようになった。高適「酬龐十兵曹」にも「耕耘忘帝力」とある。

■口語訳

嵩陽に戻らなくなってあっという間に十年たった
昔の、嵩山に隠遁したいと思っていた気持ちで今はいっぱいだ
幾人かの知人にはもう会えなくなり
少室山の三十六峯が目の前にありありと浮かぶ

ここ開封の二月、柳の枝は色づき初め
飛ぶ鶯たちの声を聞けば、涙が胸を潤す
あなたは自給自足の生活に向かわれ、私を招こうとはしない
ここから本格的に隠遁されるおつもりなのが分かる
山人はすばらしくも嵩陽への道に旅立たれた
私はここで恋々と思い慕うばかりである

■解説

韻字は「年・然・前」で、下平一先の韻。「色・臆・力・憶」で、入声十三職の韻。

高適（七〇四～七六五）[2]は、渤海（河北省）の人。字は達夫、また仲武。長く在野にあったが、玄宗朝の末に任官し、刺史・節度使などを歴任して、渤海侯で終わった。高常侍集八巻（四部叢刊）がある。旧唐書巻一一一、新唐書巻一四三本伝。

この詩は、宋州（今の河南省商丘あたり）で流浪していたときの作であろう。劉開揚『高適詩集編年箋註』は、天宝三年（七四四）、大梁（今の開封）での作とする。李白に「送楊山人帰嵩山」の詩があり[3]、やはり天宝三年か四年の作という説がある。

考察～盛唐期の天台山と文学

①はじめに―これまでの振り返り

稿者はかつて、盛唐時代までを区切りとして、詩人達が、天台山をどのように、またどのようなものとしてとらえ、詩を作ったのかについて考察した[4]。その折には、次の三つのあり方を考えた。

即ち、**A**「遠くから思いやる山」、**B**「自らは訪れないが、そこを訪れる人がいることを前提とした実体性を帯びた山」、**C**「自らがそこを訪れる山」の三者である。そして天台山の場合、**A**では「神山」や仙境と等しく、**B**では「道観などがある道教修養の場」であり、**C**では「詩人自らが山中を遊行」する「道教修養の場」であったとした。

そして東晋孫綽の「遊天台山賦」以降、天台山を題材とする詩歌が数多く作られていたが、六朝時代には**A**タイプの「遠くから思いやる神仙の山」という域をでるものはなかった。そして唐代に入ると、相変わらず**A**タイプは作られ続けるものの、**B**タイプの、天台山を「人間が訪れることを前提とする」ものが登場した。それが初唐期・睿宗朝の、司馬承禎と彼を見送る詩人達の詩作群であった。そこでの天台山は、司馬承禎という現前の人物の隠棲先という確かな実体性を帯びたものであった。また、孫綽の賦を踏まえた表現も見られたが、司馬承禎に

関わりの深い「白雲」「琴」など、それまでにない物象が登場するなど、表現の面でも新しいものが見られるようになっていた。ここまでが前稿である(5)。

②盛唐期にも継続するＡＢタイプ

盛唐期に入っても、**Ａ**Ｂ両タイプの詩は作られ続ける。**Ａ**タイプとしては、【23】(6)張子容「送蘇倩遊天台」がある。

靈異　滄海を尋ね　笙歌して翠微を訪ぬ
水鷗迎へて共に狎れ　雲鶴待ちて將に飛ばんとす
琪樹に仙果を嘗め　瓊樓に羽衣を試みる
遙に知る神女の問ふを　獨り怪しむ阮郎の歸るを

これは天台山へ向かう人を送る詩だが、笙・鶴といった王子晋伝説の小道具があり、孫綽の賦に見られる「琪樹」「瓊楼」という語に類似する言葉が用いられている。天台山で仙女と出逢ったという阮肇（阮郎）も登場するなど、仙境としての天台山像が表されている。

また李白の【46】「夢で天姥山に遊ぶの詩」では次のように言う。

洞天　石扉
訇然として中に開く
青冥　浩蕩として底を見ず
日月　照耀す　金銀の臺
霓を裳となし　風を馬となし
雲中の君は　紛紛として來り下る
虎は瑟を鼓し　鸞は車を迴らし
神僊の人　列すること麻の如し

これは、天姥山の洞窟の奥に広がる別天地、仙境を描いた部分である。李白の想像力の飛躍ぶりを表すものだとして高い評価を得ているものだが、この詩も、天台山系の山をどのようなものと捉えているか、という点でいえば、仙境、あるいは仙境の入り口と捉えているものだといえる。その点でいえば、右の【23】と同様のものである。こうした神山・仙境としての天台山像は、その後も作られ続けていくのである。

また**Ｂ**タイプのものでは、盛唐期では楊山人に関わっての試作がある。【22】張九齢「送楊道士往天台」と、【39】李白「送楊山人歸天台」の二つである。この楊道士と楊山人とは同一人物で、徳宗時代に宰相をつとめた楊炎の父である楊播ではないかとされる。この二つの詩は、天台山を住まいとする道士が、その山に帰って行くのを見送る詩である。

こうした**Ｂ**タイプの詩歌も、やはり後世でも作られ続けていく。しかし、盛唐期になって初めて登場したのが、詩人自らが天台山を訪問・遊行し、その体験をもとに作られた詩である。それは孟浩然に始まり、李白へと継承される。

③孟浩然と天台山

孟浩然の天台山入りについて、加藤国安氏は開元十八年（七三〇）のこととされる(7)。そして孟浩然の詩の中には、彼が確かに天台山を訪れたことを確認できるものがいくつか見られる。

【27】「將適天台留別臨安李主簿」には次のようにある。

定山　既に早く發し　　漁浦　亦た宵に濟る
泛泛として波瀾に隨ひ　　行行として艫枻に任す
故林　日に已に遠く　　群木　坐（やうや）く翳を成す
羽人　丹邱に在り　　吾も亦た此より逝かん

これは、これから天台山へ向かおうとしている時の作である。詩中の定山と漁浦は天台山へ向かう途上の、富春江沿いの地名だが、左に掲げた、謝霊運「富春渚」（「文選」巻二六）に見えるもので、同じ地を通った謝霊運を意識したものとなっている。

宵に漁浦の潭を濟り　　旦に富春の郭に及ぶ
定山は雲霧に緬（はるか）にして　　赤亭にて淹薄すること無し

【27】の詩の最後の聯に、孫綽の賦にある「丹邱の羽人」が登場しはする。しかし孟浩然自らがそこへ赴くことを宣言するものとなっている。訪問先である天台山自体については、この詩ではまだ具体的なイメージは表出されていない。しかしゆったりと波にまかせて進んだ先にある、木陰をなす川筋の先にあるなど、天台山への道のりが、快適な自然の中にあることは表現されている。これから訪れる、未だ見ぬ天台山に対する期待感が込められているものと言える。

【28】「舟中曉望」は、天台山へ向かう船旅の途上の作であり、まもなく赤城山に至ろうという、明け方の場面を描く。

席を挂けて東南に望めば　　青山　水國　遙かなり
舳艫　利涉を爭ひ　　來往　風潮に接す
我に問ふ今何くに去ると　　天台に石橋を訪ねんとす
坐（やうやく）く看る霞色の曉　　疑ふらくは是れ赤城の標か

赤城山が天台山の標識であるというのは、孫綽の賦に見られた表現ではある。しかし実際に彼の地を訪ねてみると、赤城山はまさしく天台山の入り口に聳える特徴的な景観をなしており、見る人にインパクトを与えるものである。この孟浩然の詩は、話には聞いており、想像し、あこがれていた赤城山が、今将に目の前に現れようとしていることへの期待を歌ったものか、あるいは暁の霞の中に浮かび上がる赤城山を、目の当たりにしての感動を描いたものだと見ることができる。

【29】「宿天台桐柏觀」は、「天台山中の道観である、桐柏観に宿泊して」という題のものである。

海汎　風帆に信（まか）せ　　夕宿　雲島に逗（とど）まる

緬に尋ぬ滄洲の趣　近くに愛す赤城の好きを
蘿を捫り亦た苔を踐み　棹を輟めて窮討を恣にす
陰に息み桐柏に憩ふ　秀を采りて芝草を弄ぶ
鶴唳きて清露　垂れ　鷄鳴きて信潮　早し
願はくは言に纓紱を解き　此より煩悩を去らん
高歩して四明を凌ぎ　玄蹤に二老を得ん
紛たるかな　吾が遠遊の意　學ばんかな　彼の長生の道
日夕　三山を望めば　雲濤　空しく浩浩たり

内容は、遙か遠くからようやく天台山に到着したことから歌い始め、隠者や神仙に思いをはせながら山中を遊行する様を歌う。自らの天台山体験を踏まえながら、山中で思い巡らした様々な思いを述べ、「煩悩を去ること」、「長生の道を学ぶこと」を歌っている。

このほか、天台山において太乙という道士と交わる詩として【30】「越中逢天台太一子」があり、同じ人物との関わりを示す詩として【31】「寄天台道士」、【32】「尋天台山」がある。

以上孟浩然の詩を検討してきたが、彼が確かに天台山を訪問し、そこに宿泊して山中遊行を行ったことは間違いない。そしてその体験を元にした詩を作っていることも間違いなかろう。ここに至って、天台山は、想像して描く山から、そこを実見して詩歌を作る対象へと移っていったのである。そして孟浩然は天台山を、道士が道教の修養をしている場所、更には孟浩然自身も、そこでの山中遊行や道士訪問などを通して、道教的な精神修養を行いうる場所としているのである。

④李白と天台山

最後に李白の詩を検討する。李白には天台山に関わる詩が十七点ほど確認できるが、その内容から四種類に分けられる。**ア**「李白自身が天台山を訪れたことを契機とするもの」、**イ**「李白以外の人間が天台山を訪れることに関わるもの」、**ウ**「神山としての天台山を詠うもの」、**エ**「山岳を描く絵画に関わるもの」である。

このうち、**エ**は、結局のところ「神仙の山」としての天台山が描かれていることから、内容上は**ウ**と同様と考えられる。これらは、天台山を描いた詩の**A**タイプで、六朝期以来の山岳観を引き継ぐものである。**イ**は、天台山を描いた詩の**B**タイプのものであり、初唐期以来のものを受け継いだものだが、魏万という人物を送る詩【44】については、それまでにない性格が伺われる。この点は後述する。

ここでは先ず、**ア**の「李白自身が天台山を訪れたことを契機とするもの」を検討する(8)。

【35】同友人舟行遊台越作
楚臣　江楓に傷み　謝客　海月を拾ふ
沙を懐にして瀟湘を去り　席を挂げて　溟渤に泛ぶ
蹇　予　前跡を訪ひ　獨り往き　窮髪に造らんとす
古人　攀づべからず　浮雲の没するがごとし
願はくは言に倒景を弄し　此より眞骨を鍊らんことを
華頂に絶溟を窺ひ　蓬壺に超忽を望まん

知らず　青春の度(わた)るを　　但だ怪しむ　緑芳の歇(や)むを
空しく釣鼇の心を持ち　　此より魏闕に謝せん

「舟に乗って台越の地に遊ぶ」という題のもので、楚臣は屈原を、謝客は謝霊運を表す。また「逆さまの景勝をもてあそぶ」という表現は、孫綽の賦にある、「天台山は、その姿を海の中に逆さまに隠している」とする表現と通じている。また華頂峯から大海を伺うとあれば、ここでの訪問先は、天台山ということになろう。

【36】天台暁望（題桐柏観）

天台　四明に隣し　　華頂　百越に高し
門は標(しる)す　赤城の霞　　樓は棲(やど)す　滄島の月

高きに憑(よ)り　遠く登りて覽れば　　直下に　溟渤を見る
雲垂れて　大鵬翻(ひるがえ)り　　波動きて　巨鼇没せん
風潮　爭ひて洶湧し　　神怪　何ぞ翕忽たる

奇を觀て　跡　倪(はて)無く　　道を好みて　心　歇(や)まず
條に攀(よ)じて　珠實を摘み　　藥を服し　金骨を鍊る
安んぞ得ん　羽翰を生じ　　千春　蓬闕に臥せんことを

李白の詩集では「天台山の明け方の眺め」、宋代・明代の天台山関係の詩を集めた詩集では「桐柏観」という題になっている。初めの四句は天台山を概説するが、霞をまとう赤城山が天台山の入り口に門のように立ち、高殿のように聳える巌の上には仙境を照らす月が架かっているとする。天台山と想像上の仙境とを重ね合わせているが、実物の天台山を眺めた経験を踏まえたものと言えるのではないか。

中頃の六句は天台山からの、おそらくは華頂峯からの眺望を歌う。華頂峯からは海が見えるとは、しばしば言われることだが、それは実際の海ではなく、眼下に広がる雲海を見てのことではないか。李白は、雲海を見下ろすうちに、大空から大海を見下ろす、鳳凰になった気持ちになっている。そしてそのまま仙界へのぼっていくことを夢想するのが最後の六句であろう。なおこの詩の題は、孟浩然の詩【28】「舟中暁望」と類似しており、孟浩然を意識して作られたものかもしれない。

【37】早望海霞邊

四明　三千里　　剏(つと)に起つ　赤城の霞
日　出でて　紅光散じ　　輝を分かち　雪崖を照らす
一餐　瓊液を嚥(の)めば　　五内に金沙發す
首を舉ぐるは　何の待つ所ぞ　　青龍と　白虎の車

早朝に天台山・赤城山を出発し、四明山に向かいつつ、赤城山を振り返っている場面であろう。赤城山を掩う霞のつぶは、朝日を浴びてきらきらと輝いており、仙薬となるのである。

以上三つの詩を検討してきたが、これらはいずれも李白が天台山を訪れ、山中を遊行し、また山頂などから彼方を遠望した

経験を踏まえているものと思われる。そして天台山に李白が何を期待しているかと言えば、いずれも人を神仙へと変化させることである。【35】の詩では「眞骨を錬る」、【36】の詩では「金骨を錬る」、【37】の詩では「五内に金沙が発生する」とあった。天台山中での様々な修養により、仙境へ昇れる存在に、我が身が変化できるとしているのである。ここでは天台山は、道教的な修養の場として捉えられている。

次に李白の天台山の詩のうち、**イ**「李白以外の人間が天台山を訪れることに関わるもの」の中の一首を取り上げる。それは「【44】送王屋山人魏萬還王屋〔并序〕」である。この詩は、五十六言の序文と百二十句（五言）からなる長大な詩篇である。訳注では詩を内容から六段に分けた。

全体として、魏万が王屋山に帰るのを見送る送別の詩なのだが、第一段と第六段だけをつなげても、送別の詩として成り立つ。そして、中間部分の第二段から第五段は、魏万が李白を追って、中原から呉越を遍歴した様を描く。おそらく自らの遊歴経験を踏まえつつ、魏万がそれをなぞっているであろうと想像し、同じ道を歩ませている。その間の叙景は、魏万の目を通してのものであると想定されているが、実は李白の記憶から呼び起こされたものである。

そして、呉越の名勝を順々にたどりつつ紹介しており、さながら、「呉越旅遊大観」とでもいうべきものとなっている。

その中で、第三段の後半で天台山を登場させている。国清寺・華頂峯・石梁飛瀑などの景勝地をあげていき、聳える峯やそれに懸かる明月、風や渓流の音などを駆使して描写し、天台山を鑑賞に堪える名山として描いている。ただし、先の李白自身が訪れたときに作った作品のような、遊仙的な雰囲気はあまり感じられないものとなっている。遊歴の対象としての天台山像である。

⑤まとめ

以上、検討してきたことをまとめると、六朝時代までは、天台山は、遠くから思い、想像する存在であり、神仙が棲む仙境、神山として捉えられていた。そこを訪問しての詩作は殆どなされず、山岳の姿も曖昧模糊としたものに留まっていた。それが唐代に入り、司馬承禎など天台山を拠点とする道士などが活動を活発化させ、詩人たちとも交わることにより、天台山像は現実の山岳として捉えられるようになる。更に道教の修養の場としての性格を表すようになる。そして更に、盛唐期の孟浩然と李白が、実際にそこを訪れ、そこでの体験に基づく詩を作るようになると、個別の山としての姿がより明らかになる。そして道教修養の場、また山中遊行の場として描かれるようになるのである。

注

（1）本稿は同趣旨の訳注の八本目で、先立つものは次の通り。

「天台山の詩歌（其一）――六朝以前（上）」『埼玉大学紀要教育学部』第五八巻第一号　二〇〇九年。「同（其二）――六朝以前（中）」『同』第五八巻第二号　二〇〇九年。「同（其三）――六朝以前（下）」『同』

第五九号第二号　二〇一〇年。「同（其四）――初唐」『同』第六〇巻第一号　二〇一一年。「同（其五）――盛唐（上）」『同』第六一巻第一号　二〇一一年。「同（其六）――盛唐（中の上）」『同』第六一巻第一号　二〇一一年。「同（其七）――盛唐（中の下）」『同』第六十一巻第二号　二〇一二年。

（2）高適の経歴は、劉開揚『高適詩集編年箋注』（一九八一、中華書局）による。

（3）【39】送楊山人歸天台。

（4）日本中国学会第六十三回大会（二〇一一年十月九日、九州大学）。

（5）拙稿「天台山の詩歌（其四）――初唐」。

（6）本稿中【　】の番号は、拙稿で検討した詩歌のうち、唐代の作品の通し番号。

（7）加藤国安「孟浩然と天台山―霊山での至高体験」『東洋古典學研究』第十八号（二〇〇四年）。

（8）李白の天台山訪問については、天宝元年（七四二）と同六年（七四七）の二つの説がある。あるいは二度とも訪れたのかもしれない。

（二〇一二年　十一月　十二日提出）
（二〇一三年　一月　十一日受理）